

芥川也寸志



メモリアルコンサートⅡ
映画音楽の夕べ

文化庁25周年・新文化拠点推進事業特別公演

芥川也寸志メモリアル・コンサート II

映画音楽の夕べ

企画・構成・お話——秋山邦晴

編曲構成——毛利蔵人

指揮——小松一彦

演奏——新交響楽団

「えり子とともに」(1951)

「煙突の見える場所」(1953)

「挽歌」(1957)

「猫と庄造と二人のおんな」(1956)

「危険な英雄」(1957)

「道産子」(1958)

「破戒」(1962)

「五瓣の椿」(1964)

「日蓮」(1979)

「八甲田山」(1977)

1994年2月13日(日)午後3時開演 田園ホール・エローラ

●主催:文化庁/埼玉県教育委員会/松伏町/松伏町教育委員会/松伏町文化振興事業団/まつぶし・音楽のまちづくり推進事業実行委員会

●協力:東宝株式会社/松竹株式会社 ●制作協力:株東京コンサーツ



ごあいさつ

本日は、『芥川也寸志メモリアルコンサートII』を開催いたしましたところ、たくさんの皆様にご来場いただき誠にありがとうございます。

松伏町では、昨年度に引き続き文化庁より「新文化拠点推進事業」の指定を受け「田園ホール・エローラ」を拠点として、特色あるハイレベルな文化活動の推進や地域文化の創造を図るため、また地域の皆様への音楽普及のためにさまざまな活動を展開しているところです。

芥川氏とこのホールとは大変かかわりが深く、ホール建設にあたり様々なアドバイスをいただきました。お陰様で、多くの方々にご来場いただき、皆様から高い評価を得ています。また、ホールの名前も氏の代表作「エローラ交響曲」から命名されています。残念ながら氏にこのホールでタクトを振っていただくという夢はかなわなかったわけですが、これらの功績を讃える意味で、昨年からシリーズとしてメモリアル・コンサートを開催しています。

今回は、映画音楽の夕べと題し、氏が手がけた多くの映画音楽作品の特集をお送りいたします。本日ご来場の皆様には、改めて氏の偉大な歩みをお感じになることと思います。何とぞごゆっくりお楽しみください。

最後にこの演奏会の開催にあたり、文化庁、埼玉県をはじめ関係各位に厚く御礼を申し上げると共に、松伏町の音楽による町づくり事業に対し、皆様方の暖かいご支援ご協力をお願い申し上げます。

埼玉県松伏町長
まつぶし・音楽のまちづくり推進事業実行委員会委員長

千代忠央

「猫と庄造と二人のおんな」(1956) はぐうたらで、女性にもだらしのないひとりの男(森繁久弥)を中心に展開される豊田四郎監督作品。先述した「芥川^{よし}節」の真骨頂が聴かれる。ことにこのなかの「猫のワルツ」のロマンティックなシャンソン調の抒情性にみちたメロディには、そういった特色が最もよくあらわれているといえるだろう。

「危険な英雄」(1957) は鈴木英夫監督作品で、石原慎太郎と司葉子を主演とした東宝映画。ここでは主題曲はギターデュエットによる最小限度の楽器編成で特色ある映画音楽。この当時、あの「第三の男」の映画音楽がチターという民族楽器の独奏でやられる破天荒の表現で話題になっていた。そのユニークな方法をギターでこころみたとはいえる確かで、観る者の心をとらえたすぐれた表現だった。

「道産子(どさんこ)」(1958) は金子精吾監督による芸術映画社作品の劇映画。北海道の広大な原野を舞台に、そこに馬とともに生きる人たちを描きだした作品。今日演奏されるのは、平野を走る馬たちを空中から撮影したシーンの音楽。

大森義夫、田村正和らの主演。

「破戒」(1962) いうまでもなく島崎藤村の長篇小説を映画化した作品だが、監督は市川崑監督。芥川也寸志とのこのコンビは「鍵」「野火」「おとうと」「雪之丞変化」「太平洋ひとりぼっち」など、すぐれた作品をうみだしている。この映画は大作でつくられ、市川雷蔵、藤村志保が主演した。

ここではタイトル音楽ほか2曲を演奏するが、なかでは交響曲第一のメロディがこっそりと挿入されていたりするところがある。

「五瓣の椿」(1964) 山本周五郎の小説の映画化。野村芳太郎監督作品。この監督とは豊田四郎、五所平之助、市川崑らとともに、芥川也寸志が最も多くのコンビをくみ、数々の映画音楽をうみだした。

父の病をよそに、不義を重ねていた母を憎む娘(岩下志麻)が、父の死後、母と関係のあった男たちに近づき、復讐をして、つぎつぎに殺していく。ひびきの旋律のその音色の感性に独特な世界をみせる美しい音楽。日本楽器(京琴、箏、鈴)なども使った楽器編成だが、ここではそれらを含まないタイトル音楽と、もう1曲を演奏する。

「日蓮」(1979) は永田雅一自身がプロデューサーとなって情熱を傾けてつくった日蓮波瀾の生涯を描いた大作で、中村登監督作品。

日蓮に萬屋錦之介が扮したが、その他、映画、演劇、歌舞伎界の総出演といった人気大物俳優が数多く出演していた。芥川也寸志もかなり入れ込んで作曲していたようだった。オーケストラといっしょに、日蓮宗の僧侶たち数十人を録音スタジオに招いて、まるで合唱団のように「般若心経」の読経をさせたりといった、大胆なこころみもみられた野心作だった。今回はステージのスペースの関係で、その部分は演奏できないが、タイトル音楽のほか、主要な2曲を演奏する。

「八甲田山」(1977) 脚本・橋本忍で森谷司郎監督が三年間の時間をかけてつくった大作。雪の八甲田山での耐寒演習で、猛吹雪に閉じこめられて、その猛威と厳しさに耐えながら行軍していった非人間的といえる軍隊の実話を描いた。高倉健、北大路欣也らが出演。たいへん話題になった作品。

封近られたとき、映画館ではドルビーのステレオで再生され、観客の後方からも雪中の行軍のマーチのテーマ曲が力強くサウンドして、ダイナミックに奏されていた。こうして観客を音楽で取り囲んでしまった。

秋山邦晴 1929年、東京生まれ。1953年早稲田大学中退。大学在学中の51年、武満 徹、山口勝弘らとグループ「実験工房」を結成、52年には「レコード音楽」「ザ・シンフォニー」の編集長となり、読売新聞他で評論活動をはじめた。以後、一貫して実験的な芸術運動を支援する評論活動を展開している。1962年、一柳 慧、高橋悠治らと創造的な演奏家集団「ニューディレクション」を組織。67～72年、ロジャー・レイノルズ、湯浅譲二と「クロストーク」シリーズ・コンサートでアメリカ、日本の新しい動向を紹介。70年の大阪万博では「お祭り広場」の音楽ディレクターを務めた。75年より多摩美術大学教授。1991年「エリック・サティ覚書」（90年）により吉田秀和賞を受賞。ほかに「日本の作曲家たち」上・下（78～79年）をはじめ著書も多い。

毛利蔵人 1950年5月20日兵庫県芦屋市生まれ。東京都立西高等学校卒業。中学生の頃から全くの独学でピアノと作曲を始める。1971年から翌年にかけて、三善晃に作曲を師事する。1973年の第42回音楽コンクール作曲部門で、弦楽四重奏曲第一番が第三位に入賞。その後、オーケストラ曲、室内楽、歌曲、合唱曲等あらゆるジャンルの作品を発表している。国内のみならず、ポストン交響楽団室内アンサンブル、ロンドン・シンフォニエッタ、リンカーン・センター室内楽協会等の外国の演奏家たちによっても、しばしば作品が演奏されている。

1988年の9月から1989年の3月まで、Asian Cultural Councilの援助を得て、ニューヨークに滞在し、帰国直前には、ロンドン・シンフォニエッタの招きにより、ロンドンでの「五月の朝」のヨーロッパ初演に立ち会う。また一方で、映画、舞台、テレビ、ラジオ等のための音楽も数多く手がけている。

小松一彦 1972年桐朋学園大学指揮科卒業。斉藤秀雄氏に師事。NHK交響楽団指揮研究員、旧西独ライン・ドイツ歌劇場副指揮者を経て1982年に関西フィルハーモニー管弦楽団初代の常任指揮者に就任。1984年度大阪府民劇場奨励賞を受賞。

1978年7月N響を指揮してデビュー、オペラや現代曲の初演にも定評があり、N響を指揮した音楽ファンタジー「もがり笛」でイタリア放送協会賞を受賞。又、NHKテレビ「名曲アルバム」の指揮者として茶の間にも幅広い人気を持っている。近年は海外での評価も高く、ロシアの名門レニングラード（サンクト・ペテルブルク）交響楽団の94年日本ツアーの指揮者に選ばれる等、その活動が現在最も注目されている国際的な指揮者の一人である。1988年より関西フィル名誉指揮者、87年より国立中国放送交響楽団（北京）常任客演指揮者、89年より札幌交響楽団専属指揮者、91年より大阪シンフォニカー主席客演指揮者、90年より京都市立芸大講師、93年より大阪芸大客員教授等を歴任している。

著書に「実践的指揮法」（音楽之友社刊）がある。

新交響楽団 新交響楽団は1956年創立以来、37年にわたり自主的に運営されているアマチュアオーケストラで、現在約130名の団員により構成されている。

創立以来、名誉音楽監督（故）芥川也寸志の指導のもと、常に新鮮な音楽体験を求め続け、特に、創立10周年記念ベートーヴェンチクルス、ソビエト及び国内の演奏旅行、ストラヴィンスキー・バレエ3部作一挙上演、創立20周年記念「日本の交響作品展」に始まる邦人作品の10年にわたる紹介、ショスタコービッチ交響曲第4番本邦初演、「中国作品展」及び当団名誉指揮者（故）山田一雄による9年にわたるマーラーシリーズ等の企画・演奏活動は、広く日本の音楽界に影響を与えてきた。

1976年「日本の交響作品展」により、「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュアオーケストラとして初めて「第3回サントリー音楽賞」を受賞。近年では、1989年細川俊夫委嘱作品「ヒロシマ・レクイエム」の初演、1991年「現代の交響作品展'91」、及び翌年の「現代の交響作品展'92」に、公募した夏田昌和「モルフエジェネシス」及び石井眞木「交響三連作〈浮遊する風〉」を取り上げ、好評を博す。このような邦人作品への取り組み、及びその社会的な評価は、今日の団独自の財産として団の活動基盤となっている。

新交響楽団は、現在年4回の自主演奏会の他、公共団体、学校等の依頼演奏会も積極的に行い、団員自らの運営を通して、常に新鮮な音楽活動を求め続け、アマチュアオーケストラとしての特色・可能性を最大限に追求した企画・演奏活動を続けている。

1993年9月には、ベルリン芸術週間からの招聘を受け、「日本」をテーマにした同フェスティバル開催中、石井眞木指揮によりベルリンフィルハーモニー・ザールで邦人作品の演奏会を行う。

芥川也寸志は交響曲や器楽曲、合唱曲のいっぽうで、映画音楽の作曲にも力を尽した。そして亡くなる七年まえ、1982年に「疑惑」(野村芳太郎監督)、「幻の湖」(橋本忍監督)の二本の作品を最後に手がけるまでに、百四本の主要な映画に音楽を作曲した。(このほかにも数多くの文化映画、記録映画の音楽を手がけた)。

そして「煙突の見える場所」(1953)で第8回毎日映画コンクール映画音楽賞、「砂の器」(1974)で第29回同音楽賞(菅野光亮共作)を受賞したことでともわかるように、注目していい仕事をいくつも残した。カンヌ国際映画祭で1954年度のグランプリを受賞した衣笠貞之助監督の《地獄門》では、笙やひちりきといった雅楽の楽器をオーケストラといっしょに用いて日本の伝統的なひびきの世界をうみだし、その個性的な表現が西欧でも注目されたりした。

「砂の器」で菅野と共作したように、芥川也寸志は何人かの若い作曲家と組んで仕事をしたこともあった。たとえば「太平洋ひとりぼっち」(1963)では武満徹と共作したが、その他、林光、八木正生、松田 昌、毛利蔵人らとも、いっしょに映画音楽の共同作業をこころみた。

芥川也寸志の映画音楽の特色をひとことというならば、彼のトレイド・マークといってもいいような美しく抒情的なメロディの魅力であり、そのうたいあげようとする“ソング”の性質の抑揚をいきづけるモダンなセンスの器楽法の妙味である。ひとは、それを“芥川^{ボシ}節”などといったりする。

そのいっぽうに、彼の独自のリズム・オスティナートの特色をもった軽快なリズムの魅力である。「煙突の見える場所」で聴かれるあの躍動感にみちて明快なリズム的な表現、単純な旋律動機とリズムの反復による独特な表現は、日本の映画音楽史に新しい1ページをつくりだした傑出した表現であり、彼の初期管弦楽作品と比べても、遜色のないきわめて斬新なものである。

今日は、そうした芥川也寸志の映画音楽のなかから、代表作の十作品を選んで、映画の上映を挿しはさみながら小松一彦指揮＝新交響楽団の演奏でお愉しみいただくという異色のコンサートである。

「えり子とともに」(1951)は豊田四郎監督作品の映画音楽だが、芥川也寸志自身の映画音楽第一作。この音楽は前回のコンサートに、毛利蔵人編曲ですでに演奏紹介したが、彼の最初の作品ということで、今回もぜひ演奏したい。

もともとはNHKの人気ラジオ・ドラマだったものの映画化。流麗でリリカルな美しいメロディが当時ひとびとに愛唱され、人気があった。

「煙突の見える場所」(1953)は五所平之助監督作品。見る角度で四本が三本になったり二本になったりするお化け煙突の見える荒川堤に近い貧しい住宅地を舞台に、そこで展開される、悲しさのなかのユーモアとでもいえるような夫婦のあいだの庶民生活的なドラマが描かれる。椎名麟三の短篇小説の映画化。映画音楽としては珍しく、リズム構造の表現をみせているユニークな傑出した音楽。先述したように、昭和二十八年年度第8回毎日映画音楽賞を受賞した。

「挽歌」(1957)は五所平之助監督が原田康子の小説を映画化した作品。この長篇小説は昭和三十一年に出版されると一年間に67万部が出て、記録的なベストセラーとして話題になった。

北海道のエキゾティックな風物を背景に、ちょっと小悪魔的な奔放でややニヒルなヒロインの一種背徳なロマンスが描かれている。戦後の女性解放の空気のひろがるなかでの自我の模索であり、感覚的に巧みに描かれている。その女主人公の心のゆれうごくありようをそのまま浮かびあがらせるオーケストラの感傷性のメロディ。